

いぬわん～厨二病女王
とキモオタ僕との命を
かけた飼いい飼われゲー
ム～

せらぎ花雄

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

偏差値71を誇る超名門校に通うキモオタの僕の生活は、質素だった。

ゆつくりと日々日常を味わっていた響だったが、ある出会いを機にその生活は一変する

「ブスくん、私に飼われてみない？」

厨二病女王様とキモオタ主人公の一步も譲らぬ

エンターテイメントラブコメが今始まる

目次

プロローグ | 1

第1話 厨二病女王様の降臨だ | 4

プロローグ

「みんなの彼女、『I W W 5』でーす！」

『キヤー』、『わー』というおじさんのむさ苦しい低音ボイスと汗、曇ったステージが彼女たちを包み込む。僕、影丘響もそんなおじさんたちの一員だ。年齢はまだ17歳だが、周りのおじさんには負けられないほどのI W W 5への愛、そしてエロスを獲得している。と確信している。何を隠そう、僕は年齢イコール独り身で、ここ数年I W W 5以外の異性と交流をしていない。

中学校3年生だった僕は、クラスに男子が5人しかいない高校をわざわざ選び、女の子に取り合いをされながらキラキラな学校生活を送れるものだと思っていた。

しかし、現実はそのなかに甘くなかった。35人女子、5人男子の状況で僕だけ彼女がない。僕のクラスだけでも、男子は貴重な存在だ。それに加えて、女子のみの学部が多数存在する僕の学校で、余っている男子はほんの一部。

理由はそれぞれで、僕のようにただモテないような人間もいれば、ヤンキー、喫煙者といった不良行動が原因の輩も稀にいるが、彼らは彼らなりにヤンキータイプ！という彼女と付き合っている……というよりは、従えている。

ムチで彼女を喜んで叩く彼氏、それを喜んで受け入れる彼女、なんとも異様な光景に僕は恋人という存在に恐怖を抱えていた。

「彼女ができて、もし恐ろしい要求をしてきたらどうしよう」という無駄な悩みに頭を抱えていた。

一方でIWW5のクラブハウスには僕と同じ種族の人間ばかりいる。IWW5のクラブハウスこそが、僕の唯一寛げる場所だった。特に僕が最推しているのは、清楚系美少女、片山マリルことマリリン！

誰もが一眼で恋に落ちてしまう……そんなオーラというか、ボディイイというか、大きなお胸……。ではなく、とにかく絵に描いたような少女で、僕とは正反対の世界に生きる人間だ。180。違った世界の人間を応援できるだけで、神様に感謝をしようと思う。

そして、僕は正当応援隊である限り、マリリンを裏切るなんてことはあり得ない。

正当応援隊とは、IWW5を『彼女』と呼んでやまないキモオタ集団の中でも、最もキモいとされている種族のことだ。

「正当」と聞くとなんとなくポジティブな印象を受ける人がほとんどだろう。でも、世間はそんなにも簡単ではない。「正当応援隊」といかに社会的秩序を守っているような集団が実はまじキモ集団だったりするのだ。僕含め彼らはIWW5のグッズ、握手

券、CDなどを全て回収し、全て自分たちのものにする！と日々大量のグッズ、CDを購入している集団だ。

正当応援隊の存在はIWW5の事務所にも名が知れ渡るほど有名な存在だった。事務所的には大量にグッズ、CDを購入してくれる正当応援隊の存在は大切な乞食だった。そのため、「CD握手券の倍率〇〇倍！」といった話をもてかけては、IWW5の存続の危機を保っていた――。

第1話 厨二病女王様の降臨だ

春の風が僕の長い髪の毛を揺らし、桜の舞う季節がやってきた。希望と夢を語っていた中学校3年生の頃が僕は一番幸せだった。勉強は常にトップを駆け走り、たくさんの人が僕に『勉強教えて』と放課後やってくる。部活も完璧で、中学校から続けているバスケを続け、体育館の2回では僕のことをたくさんの生徒や観客が応援してくれる。そんな、憧れの存在になる気満々だった。

しかし、僕の理想だった学園生活は決して煌びやかなものではなかった。僕の目指したこの竜天学園は、県内屈指の名門校。

中学校の頃こそ、IWW5のライブチケットやCDを買ってもらうために何も考えず、気づいたら学年トップを独占できていたが、偏差値71を誇るこの高校には『天才』と呼ばれる輩がそこら中にいる。『勉強教えて』の夢は遙か彼方、遠い夢と化してしまっていた。

バスケット部は男子が少ないのにも関わらず、超強豪部で僕には手も足も出せなかった。中学校の頃は足も早く、部活でキャプテンを務め、誰からも尊敬される存在だったが竜天高校のバスケット部で100m13秒はとてつもなく遅い。

スターティングメンバーは皆、100m10秒台をキープしており、僕には手の届かない天才ばかりだ。

それに加えてイケメン揃い……。学力の偏差値、運動能力、顔面偏差値も与え、神様は不公平だなど改めて感じた。

高校に入学してからは、何も無い。

過去の自分に問いたい『なぜ、大きな希望を抱いてしまったのだろうか。なぜ僕はあらゆる才能を兼ね備えた天才ではないのに、竜学園なんて高校に入学してしまったのか』と。

まあ、おそらく中学校3年生の僕に聞いても、くだらない回答しか返ってこないのだろうなと思いつながら、桜の花道を歩き始めた。

ダダダダダツツツツツ

「おおおおおーいいい！おいおーいいい！」

（朝から喧嘩か……。うるさいな）

「おい、君！」

誰が呼ばれているのかわからないが、近所迷惑だ。早く当事者返事してあげろよと思いつながら、僕は美しい桜坂の春風を感じていた。

「あなたよ、桜の季節に合わない顔しよって何を映画のワンシーンを演じておる」

そう言つて誰かが僕の肩を叩いた。

そこには同じ学校の制服を着た美少女が立っていた。制服は校則通りにしっかりと着こなしているものの、奇抜な金髪と、真っ赤なりボンのカチューシャをつけた彼女は、厨二病感が隠せていなかった。

おそらく僕の通う学校の女子制服が童話に出てくるアリスのお姫様のようなデザインだからだろうと思いつつ、「痛いな……。」と感じていた。

しかし、ふと前日に読んだIWW5の運命出会いシチュエーション雑誌の光景が脳内をよぎった。雑誌の写真と同じような出来事が僕の目の前に起きていることを察知僕は、胸の鼓動が増速した。

このあとのシチュエーションは……。この後のシチュエーションは……。と慌てふためいている時に彼女は口を開いた……

「君のことだよ、ブスくん」

「……………」

ぶ、ブスくん……………?

彼女は他の誰でもなく僕の目をじっくり見ながら笑顔でそう言った。ブスってあの……意味のブスかな?

かわいい顔で声をかけてきてくれた運命の出会いを果たしたお姫様と思ってしまう僕が間違っていたようだ。

も、もちろん僕は他人から見たらブスである。だが、なぜゆえに道端で大きな声で見知らぬ学生にブスだと言われなければならないのか。僕の父と母を巡り合わせ、ブスの子を産んだ神様を憎んだ。

「ねえ、おブス。あなた、私に買われてみる気はないかしら？」

彼女は僕を一人称の『君』や『あなた』で呼びはしない。なぜか変わらず僕は『ブス』だ。彼女の目と厨二病精神がとても深刻な状態なのではないかと疑ったが、現実的に考えて、僕は誰が見てもブスだ。彼女の目は正しい。ただ口が悪く、表現の能力が足りていないお嬢様なのだろうと、強制的に受け入れた。でも……。『買われてみる』とはなんだ……。僕はIWW5の正当応援隊だ。マリリンのために生きると誓った僕がここでペットになって自由を奪われるなんてごめんだ。

「はん?!君何言ってるの。買われてみる? (キラン) ってなんだよ!てか誰だよ」

同じ学校の生徒であれば、重大な事件や犯罪に巻き込まれることはないのではないかと僕は50%の生存確率に命をかけた。

生きて帰るか死んで帰るかの2択。後戻りのできない僕は息を呑んだ。

周りの生徒は僕たちの会話を青ざめた目で見ている。こんな厨二病女に何を恐れて

いるのか。

ガンツ

「あら……。この犬つたら躡がなっていない上に、脳みそも小さいのね」

彼女は持っていた傘の先をアスファルトに勢いよく叩きつけ、少しかけた傘の先で僕の顎を刺した。グイッと顎をあげて僕をガンつけた。

(おお……。まずいぞ。さすがにまずいぞ……。)

ヤンキー雑誌なんかでよくつみるシーンだがいざ体験してみると、とても怖い。あと1cmもズレれば僕の目は抉り取られていたと思うと背筋が凍るような冷やかな汗が流れた……。

ああ、僕は50%の確率を見事に外して、死んで帰るのだなと悟った。

ガンツ

バキツ

何かが欠けるエグい音とともに彼女は僕を嘲笑った。

「私の名前は嶺セイカよ。あなた気に入った。私のわんわんになりなさい。」

僕が目を開けた時、日傘の傘先の先端が二つに割れた状態で僕の足の前に転がっていた。

たった2発、アスファルトに傘先を叩きつけただけでプラスチックで出来た傘先が真つ二つに割れた。ゴリラかな？と思いつつ、今回は傘先が僕の肩代わりをして先に死んでしまったのだなと思い、傘先を崇拜した。

「ところで、ブスくん。君の名前なんていうのかしら？」

「影丘響です」

僕の名前を聞いて、同じ団（暴力団）の人に頼んでこれから拷問場にも連れて行かれるのかと思ったが、ここで死ぬより1日でも長くいきよう。1日でもマリリンに貢ごう。と思い、僕は簡単に名前をベラベラとしゃべってしまった。

まあ、僕の想像とは裏腹に彼女は僕の本名に興味はなかった様子だ。何かと想像が大外れするなと思いつながら、彼女と相性が悪いことは確かなのだな、2度と近づかないでおこうと心に決めた。

「そう。でも響つて名前、イケメンが使つてそうで嫌だわつ。でもね、『ブスくん』って呼んでいると私の株が下がるから……。そうね、『犬くん』でどうかしら」

ブスだからという理由で名前を否定されたことはこれまではなかった。これまでは、

ブスと言われて苛立ったことはなかった。そうだよな、『僕もそう思う』で納得できたからだ。

でも、僕は初めて顔面をバカにされたことに苛立った。いくら「ブス」と言われ慣れている僕でも、名前を侮辱されたことはさすがに許せなかった。

「いいですよ。でも僕たち、元は赤の他人です。偶然であわなければきつともう会うことはない。そして、もう2度と僕の本命を呼ぶのはやめてください」

『やめてください、ご主人様?』だろ?」

「やめてください、ご主人様っ」

「よろしい、でもね、私『ご主人様』って呼ばれる趣味はないの。」

フツツと嫌な顔をしてからこう言った。

『セ・イ・カ・さ・ま』よっ」

僕の権利は良しに彼女は笑顔で僕を睨んだ。